令和７年度　国補道路改築（地域連携）事業に伴う埋蔵文化財調査業務

薮越（やぶのこし）遺跡 発掘調査現場公開資料

令和７年（2025年）12月３日（水）・４日（木）
（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター

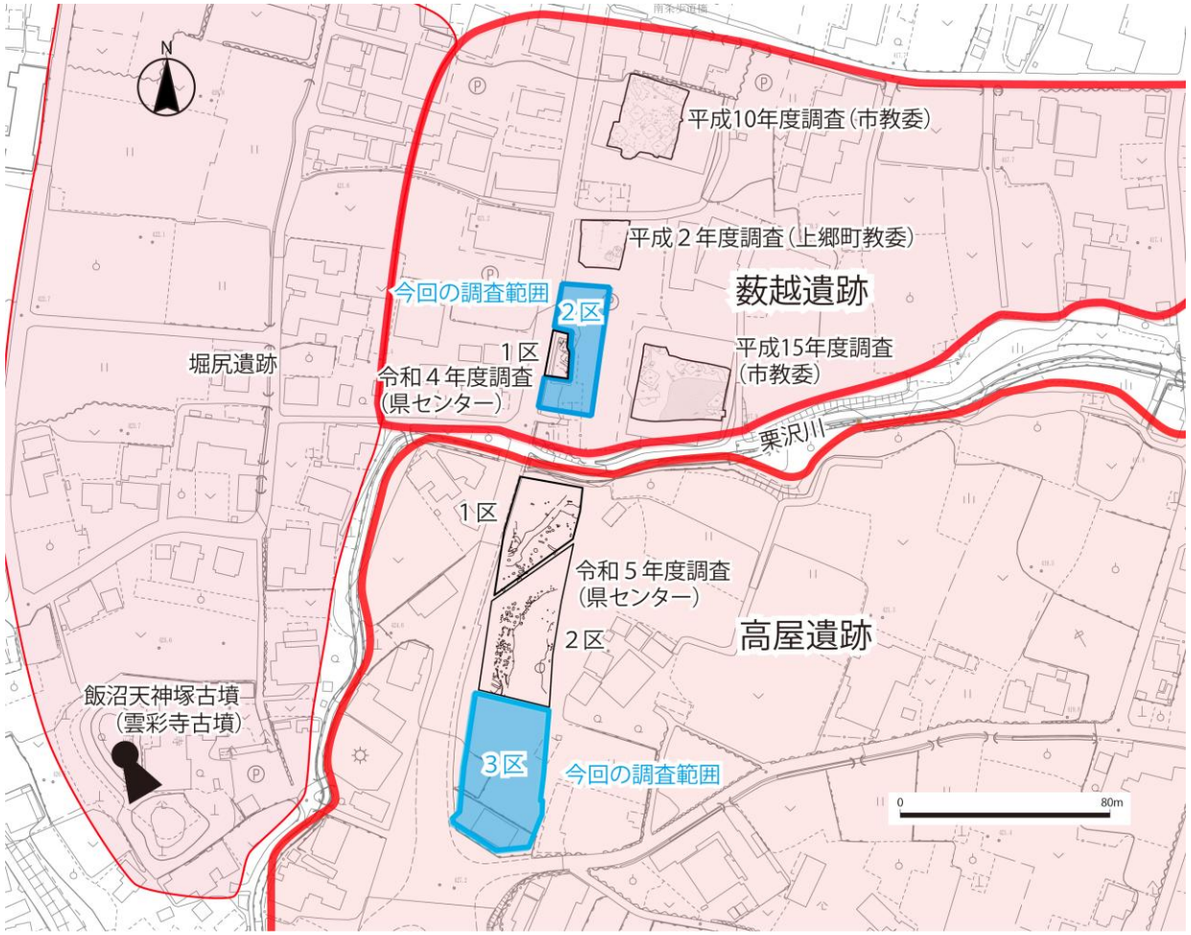
薮越遺跡・高屋遺跡遠景写真（東側から撮影）

《遺跡の概要》

薮越（やぶのこし）遺跡は、天竜川右岸の低位段丘に立地し、天竜川支流の栗沢（くりさわ）川左岸に広がる遺跡です。

過去に飯田市教育委員会や旧上郷町教育委員会によって３回の調査が行われました。国道１５３号飯田市飯田北改良に伴い令和４年度から長野県埋蔵文化財センターが調査を行っており、今年度で２年目の調査となります。これまでの調査の結果、弥生時代後期から古墳時代を中心とする集落の存在が明らかになっています。

遺跡の西側には飯田古墳群が展開し、前方後円墳である飯沼天神塚古墳（いいぬまてんじんづか）（雲彩寺古墳（うんさいじ））をはじめ多くの古墳が点在しています。



薮越遺跡・高屋遺跡調査区位置図（飯田市埋蔵文化財包蔵地図に加筆）

《今年度の調査》

今年度の薮越遺跡は令和４年度調査区に隣接した場所（２区）で900㎡を調査し、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴建物跡（たてあなたてものあと）19軒や土坑（どこう）20基、溝跡（みぞあと）2条がみつかりました。

特に、調査区内の北側でみつかった、８世紀頃の竪穴建物跡SB20は大形で礎石（そせき）をもっており、身分の高い人の住居であったと推測されます。

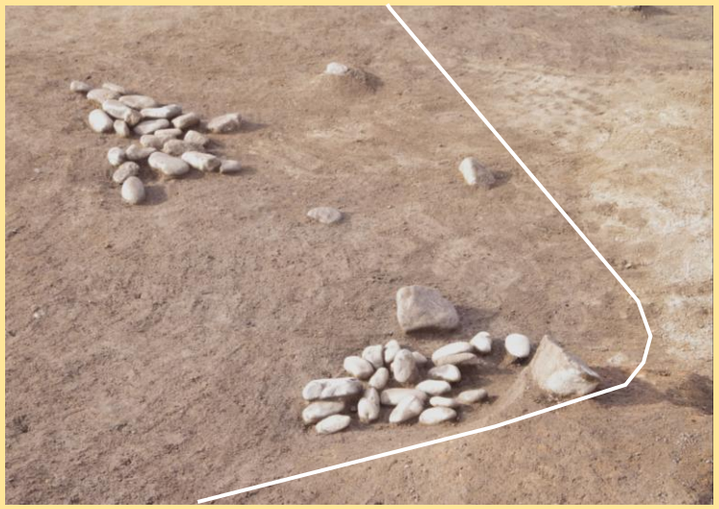
また、SB20の北隣の竪穴建物跡SB24からはムシロや編布（あんぎん）等を編む際に使った「こも編み石」が出土しました。SB24は編み物を行っていた建物と考えられます。

竪穴建物跡SB13はカマドの周辺から、土器が多く出土しました。形が残っているものも多く、カマドを破棄するときの祭祀（さいし）で置かれたものと思われます。今回の調査では、このようなカマドを破棄するときの祭祀の痕跡がSB8やSB11、SB14など、多くの竪穴建物跡のカマドでみつかりました。

「こも編み石」の出土（SB24）

・住居の角で「こも編み石」の集石（しゅうせき）が２か所みつかりました。

・内１か所は中心の石を立てて、その石に向かって意図的に放射状に石を並べています。



（白線がSB２４の範囲）

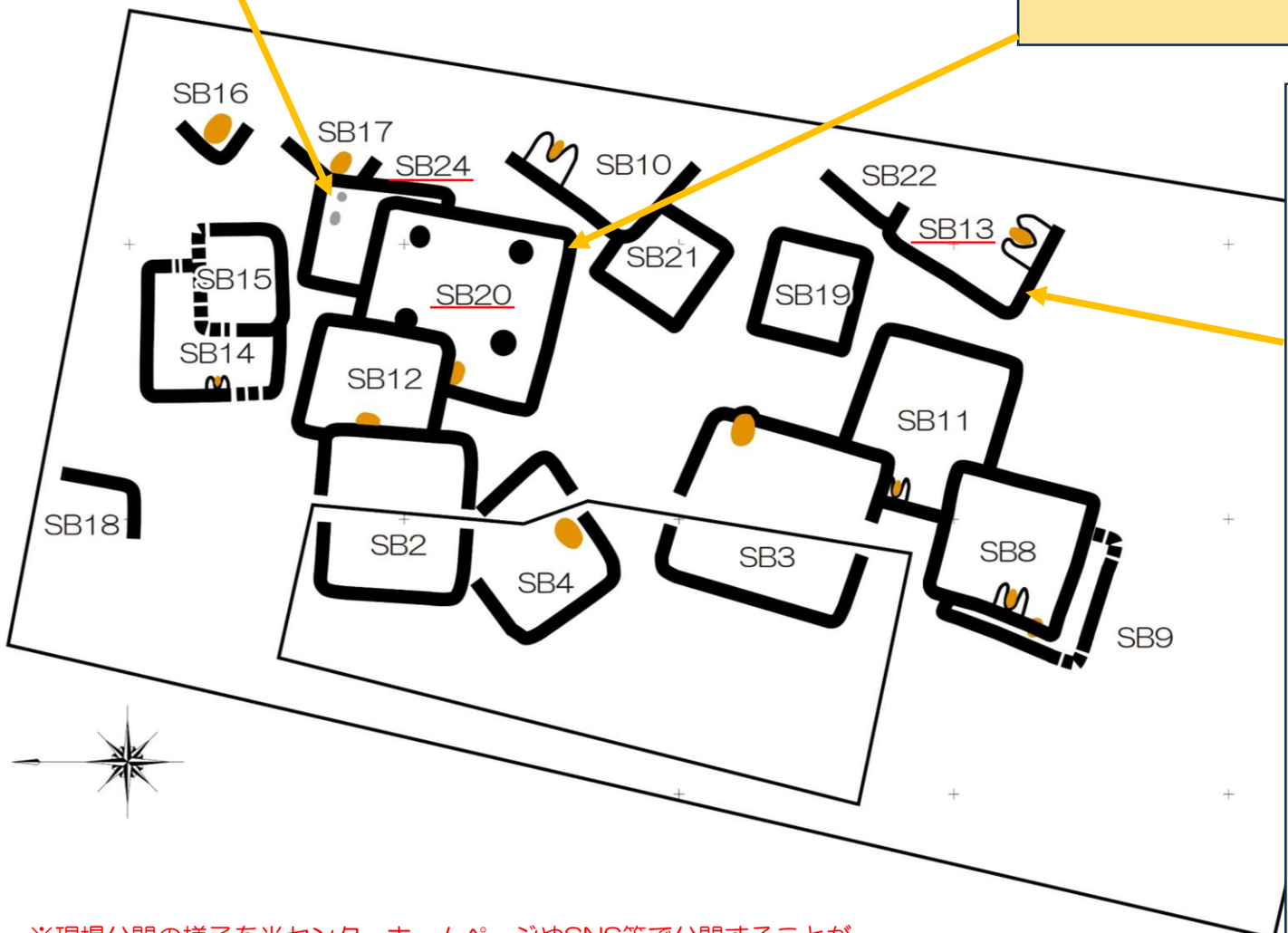
礎石をもつ竪穴建物跡（SB20）

・一辺が約6mの大形の竪穴建物跡です。

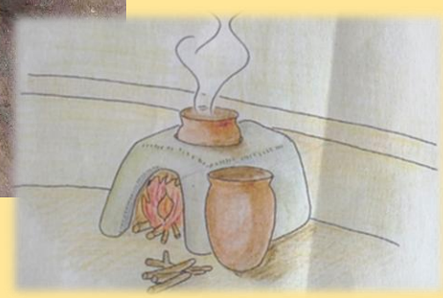
・本来、柱を据える穴の位置に礎石を配置し、壁際にも石を並べています。

・壁際の石にも柱を立てて梁（はり）を巡らせていたと考えられます

（白線がSB20の範囲）



竪穴建物のカマド（SB13）



カマドの復元図（長野県埋文2005）

・カマドの袖部（そでぶ）には構築材として自然石が用いられており、掛口（かけぐち）には煮炊きした甕（かめ）を支える支脚石（しきゃくいし）が残っていました。

・カマドには坏（つき）や甕が据えられていました。建物やカマドを破棄した際に据えられたと考えられます。

※現場公開の様子を当センターホームページやSNS等で公開することがあります。ご承知ください。

参考文献　長野県埋蔵文化財センター2005『三角原遺跡』